

高等学校体育における弓道授業の実態

－導入に向けての課題とその解決策－

小川貴子 （ 筑波大学 ）

1. 目的

本研究では、高等学校における弓道授業の導入に向けて、その実態と成果を明らかにすることを目的とした。得られた知見をもとに、指導者の確保、施設の整備、用具の整備、安全管理の4つの観点から、弓道授業の導入のために留意すべきことを検討した。

2. 研究方法

- 1) 弓道の授業を実施している私立A高校を対象として、フィールドワークを行った。授業の様子を1台のビデオカメラで録画し、時間、活動内容、指導内容、教師の声かけ、生徒の様子、施設・用具、安全管理の7つの観点から内容を整理した。
- 2) A高校の弓道授業を2023年度に1年間受講した調査時1年生女子30名、2024年度に受講していた1年生女子49名を対象として、質問紙調査を行った。質問項目は、鼻岡ら(2017a)等の先行研究を参考に作成した。
- 3) 高等学校の保健体育の授業において弓道授業を実施した経験のある教師3名を対象に、1名は半構造化インタビューを行い、2名は質問紙を送付して、回答を依頼した。

3. 結果と考察

1) 授業の実態

A高校の弓道授業は、週1回の通年授業であることが特徴の1つであった。指導内容として、「射法八節」の学習を行い、的から3mほどの近距離から発射することで、実際の的への発射を可能としていた。指導内容については、礼儀・作法の観点と、技術の観点が重視されていた。安全管理については、「弓具は殺傷武器であること」が授業の最初に強調され、授業中も、教師は繰り返し安全管理についての注意を行っていた。また、矢を取りに行く際は教師の指示で一斉に行うなどの対策も講じられていた。

2) 授業の成果

質問紙調査では、受講前に弓道を行ったことがない生徒が85.1%であり、弓道授業の楽しさの理由として、「新しい体験」の回答数が最も多かった。このことから、生徒にとって経験のない種目を行うことは、授業を楽しいと感じる要因となると考えられる。体育を不得意と感じている生徒が約4分の1を占めていたが、弓道の授業を「楽しかった」、「どちらかというと楽しかった」と回答した生徒は91.3%であった。このことから、弓道は体育に対して苦手意識を持っている生徒でも、授業を楽しいと感じられる可能性がある。

3) 弓道授業の意義

弓道授業の経験を有する教師へのインタビューでは、弓道を高校体育で導入する意義として、体育が苦手な生徒や、コミュニケーションが苦手な生徒でも弓道を楽しめるというメリットが明らかとなり、生徒が卒業後も生涯スポーツとして弓道を継続していく可能性も示唆された。

4. 結論

本研究で得られた知見から、弓道を高等学校の体育授業で行うために考えられる課題の解決策を、以下の通り提示した。まず指導者の確保についてはティーム・ティーチングや外部指導者を活用すること、施設の整備については公共施設や、校庭の隅や体育館を仮設の道場として活用すること、用具の整備については弓具店でのレンタル制度や道場等の施設の忘れ物、不用品の回収、代用品を工夫すること、安全管理については授業の規模に合わせた教師の配置や生徒への注意喚起、授業での約束事を徹底すること、防矢ネットなどの安全対策などが可能である。

5. 主な参考文献

鼻岡美里・栗田昇平・柿山哲治(2017a)中学校武道領域における弓道授業の教育効果：F県K市立K中学校を対象とした意識調査, 武道学研究, 49(3):201-212.